# 草津温泉に籠る 2024

2024 年 7 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

群馬県の草津温泉に避暑を兼ねて執筆作業のために 5 日間逗留してきた。私はこれまで何度も草津温泉を訪れているが、このような目的での訪問は初めての試みだった。

■憧れ

私は文豪たちが旅館に籠って執筆するという姿に憧れを持っている。旅行先でたまたま泊まった温泉宿の女将が「この部屋は有名な小説家の先生が 1 カ月間籠って小説を書いていました」などというエピソードを聞くと、何かワクワクして羨ましいという気持ちになる。

そしてその憧れは、むしろ最近になって増している。それは私が初めて書いた本「遠い世界に旅に出よう」が最近出版されたことも影響しているのかもしれない。

出版ついでに小説家のまねごとをしようと思い、1 人で温泉宿に籠り執筆するという旅を計画した。さすがに 1 カ月間は難しいので日数は大幅に短縮して、場所は草津温泉にした。

草津温泉を選んだ理由は、万病に効くという天下の名湯に浸かりながらの執筆も悪くない、さらに 7 月の暑い時季なので標高 1200m の草津ならば避暑にもなるという思いもあった。それ以外にも草津の湯畑周辺にはお洒落な店が多く、活気ある街なので散歩すれば刺激ももらえるという算段もあった。

有名小説家ならば滞在費は出版社から出るだろうが、私の場合はそんな訳にはいかず、費用の面も考慮して宿を選ばないといけない。

■おおるりグループ

幸いにして草津にはホテルチェーンの「おおるりグループ」の宿がある。

このグループは経営難に陥ったホテルを安く買い取り、独自のノウハウで再生するというビジネスを展開しており、そのために宿泊者は驚くほど安い費用で泊まることができる。安いだけでなく温泉にもこだわっているのがこのグループの宿の特徴だろう。

同様なビジネスを展開している伊東園ホテルズや大江戸温泉物語などもあるが、私の知る限りおおるりグループが一番古く、そして一番安い。

私がおおるりグループの宿に初めて泊まったのが 30 年程前で、1 泊 2 食付で首都圏からの送迎バスもついて 4000 円台前半だった。当時としては衝撃的な価格だった。

夕食は 1 枚の皿に料理を載せた“ワンプレートご飯”で、当然みそ汁も出てきた。すると宿泊客の 1 人が「えー！みそ汁もつくの？」と感激して見ず知らずの私に話しかけてきたほどだ。彼は値段相応の質素な食事を想像してきたようだが、想像を超えて相当感激したようだった。

やはり旅は期待しすぎると落胆するが、その逆のパターンは感激に転じる。それにしてもみそ汁に感激するとは、私はむしろそのことに驚いたので記憶に残っていた。

この価格破壊がマスコミ各社に取り上げられて、その後も順調に業績を伸ばして、最盛期には関東地方全域で十数店舗を展開していた。しかし顧客ターゲットが中高年層だったので、新型コロナウイルス感染症の影響をもろに受けて多くの店舗が閉鎖に追い込まれた。

現在では草津温泉、鬼怒川温泉、塩原温泉のたったの 3 店舗になってしまった。

■ホテルニュー紅葉

今回は草津温泉のおおるりグループの宿「ホテルニュー紅葉」に泊まった。

かつては草津温泉に 3 店舗あって、首都圏各地から送迎バスが何台も出ていたが、現在は 1 店舗になったこともあって高崎駅から草津までの送迎バス 1 台になっている。それでも高崎から無料でホテルまで連れてきてくれるので、ありがたく利用させてもらいチェックインする。

宿は鉄筋コンクリート 10 階建、建築後それなりに長い年月が経っていているようだが、草津ではこの宿だけを存続させるのでリニューアルをしたのだろう。真っ白な外壁は新しそうに見えて、まるで熟年女性芸能人の厚化粧のようで、巧みの技に感心してしまう。

部屋に入ると壁紙も新しく張り替えられている。和室なので畳が敷いてあり、畳の上にはベッドが存在感を示して置かれている。和洋折衷とはいえ奇妙な感じはするものの部屋の中でスリッパを履く必要がなく意外に楽に過ごせる。これは案外、今回の私の宿泊目的にマッチしているのかもしれない。

【ホテルニュー紅葉の外観と私が泊まった部屋】

このホテルは朝食も夕食もビュッフェスタイル、日本流に言えばバイキング方式なので、毎日ほぼ同じ料理が並ぶ。朝食はそれでもいいが、さすがに夕食が毎日同じでは飽きてしまうに違いない。そのため私は初日と最終日だけは宿の夕食を食べ、他の日は外食することにした。

幸いにして草津温泉は“宿食分離”が進んでいるので、宿で食事をとらずとも温泉街を歩けば各種飲食店がそろっている。

■宿食分離

宿食分離とは、宿は泊まるだけで食事は外のレストランや食堂で食べる形態をいい、文字通り宿泊と食事を分離することを意味している。最近は観光庁も推奨しているが、そもそも１泊２食付という宿泊形態は海外では珍しく、日本独自の文化・習慣かもしれない。

大昔、日本の温泉は日帰りの温泉入浴のみだった。やがて宿泊という付加価値をつけ、食事は宿泊客が自炊するという湯治宿ができた。さらに食事という付加価値をつけたのが温泉旅館で、現在の日本の温泉地にある旅館やホテルの一般的な姿になった。

しかし最近はそれが宿にとって大きな負担になっている。夕方になると食事の支度と宿泊客の受け入れが重なり、夜まで忙しさのピークが続く。人手がたくさんあった時代は問題なかったが、産業構造の変化によって従業員が減っても同じサービスを提供するので、残った従業員は労働時間過多になり従業員不足や後継者不足に追い込まれている。

こういった宿側の理由だけでなく、お客のニーズも変化してきている。一般的な旅館の食事は「これでもか、これでもか」と豪華な料理が出てくるが、最近の宿泊客は食の好き嫌いや健康志向、あるいはアレルギーや宗教上の理由など食事に気を使う人が増えている。ライフスタイルの変化で夕食時間を過ぎてチェックインする人もいる。そのため素泊まりや朝食だけでいいという宿泊客が増えてきている。特にそのような傾向は若者や外国人に多く見られる。

従って宿食分離が進むのは必然で、これからの温泉旅館の営業スタイルの主流になるだろう。ただしそれができるのは有名温泉地、それも多くの若者や外国人が泊まりに来る温泉地で、小さな温泉地ましてや山奥の一軒宿ではそれは成り立たない。

■ソースかつ丼

草津温泉には多くの若者や外国人が来訪し、中心街の湯畑周辺にはたくさんの食事処がある。それらのいくつかの店では「群馬名物ソースかつ丼」ののぼり旗が立っている。

実は私が生まれ育った桐生市も同じ群馬県にあり、市内にはソースかつ丼を提供する食堂が何軒もあった。当然私は子供のころからソースかつ丼を食べており、それゆえソースかつ丼は全国的な食べ物かと思っていた。ところが高校生になって他の市町村から桐生の高校に通っている友人たちと親しくなってソースかつ丼は桐生にしかないことを知った。

しかし大学生・社会人になって全国各地を旅するようになって、それがまた覆った。桐生市以外でもソースかつ丼発祥の地を名乗る場所が存在することを知った。

それをきっかけにソースかつ丼を食べ歩いて色々調べていくと、以下の４ケ所がソースかつ丼のルーツらしいことが分かった。それは群馬県桐生市、福島県会津若松市、長野県駒ケ根市、福井県福井市になる。ここではその詳細については触れないが、私が書いた旅行記の各所にその記述がある。（関連旅行記「極寒キャンプ 2017」、「極寒キャンプ 2019」、「琵琶湖・北陸の旅 2019」、「紀伊半島の旅 2019」、「わたらせ渓谷鉄道の旅 2022」）

どこのソースかつ丼もカツをソースにくぐらせて丼にするという基本は同じだが、肉の部位やソースの種類、キャベツの有無などが異なっている。

さて草津の食堂のソースかつ丼に話を戻す。

たまたま入った店は豚ヒレ肉にウスターソースを使っているから桐生と同じだが、私が慣れ親しんだ味とは少し違っている。ソースの味が濃く、あっさり感がない。さらにカツの下に千切りキャベツを敷いてあるが、桐生ではキャベツは敷かない。

しかし細かいことは、まあいいか。

【草津のソースかつ丼】

多少の違いはあるにせよ、もはやソースかつ丼は群馬県の名物になっている。流派を飛び越えて福島、福井、長野と連合すれば、卵でとじた醤油味の“普通のかつ丼”と並ぶ地位も確立できるだろう。

だが、待てよ。そんな地位を築いてしまったら、ソースかつ丼が普通のかつ丼のようになってしまい名物でなくなってしまう。

名物とはある地域に限定しているから名物として存在する。名物とはそういうものかもしれない。

この奥が深い（？）ソースかつ丼については、いずれ検証の旅に出て旅行記でまとめたいと考えている。

■籠る

今回は同じ部屋に連泊しているので、宿の食事時間以外は一日中自分の都合で過ごすことができる。そのため宿に籠っての作業は、すこぶる快調で作業効率もよい。気分転換に時々温泉街を散歩するが、これもまた楽しい。

宿の大浴場は午前中の 3 時間は掃除で入浴できないが、それ以外は夜中でも入浴できる。私は１日に最低５回は温泉に浸かって、心身ともどもリフレッシュすることができた。

執筆で悩んでいた時も、露天風呂に浸かって外の景色を眺めながら何となく考えていると妙案が浮かんでくるもので、万病に効くという草津温泉の凄さを改めて感じ入ってしまった。

今回は私 1 人で泊まっているが、同じ目的を持った仲間と一緒に合宿のように利用するのも良いかもしれない。

そんなことを考えていたら、昔行った“学生村”を思い出した。

学生村とは、夏休みの暑い時期に長野県の涼しい高原で集中的に勉強することを目的にした民宿の集まりで、当時は結構流行っていた。

しかしそのような神聖（？）な場所に当時高校生だった私と仲間たちはギターを持ち込んで騒いでいたので、勉強を目的に来ていた予備校生や大学生から叱られたことを思い出した。

そんな 50 年前のことが昨日のことのように思い出されるのは、名湯にたくさん浸かった効能なのか、それとも加齢による懐古志向なのかわからないが、いずれにしても平穏な時を過ごすことができた。

後になって思ったことは、このようなことも“癒し”と呼ぶのかもしれない。

■旅の記録

実施は 2024 年 7 月 15 日（月）～7 月 19 日（金）の 4 泊 5 日、その行程を示す。

- 1 日目　午前中に自宅を高崎駅まで電車で行って、宿の無料送迎車に乗り 15 時に草津温泉「ホテルニュー紅葉」チェックイン、宿で夕食
- 2 日目　宿に滞在、昼食と夕食は外食
- 3 日目　同上
- 4 日目　宿に滞在、昼食は外食、夕食は宿でとる
- 5 日目　10 時に宿を出て、無料送迎バスで高崎駅、そして電車で自宅に戻る。

総費用は約 45000 円、詳細は以下に示す。夕食付と夕食なしの差が 1100 円なので、食にこだわらずにゆっくりと宿で夕食を食べるならば全て 2 食付にしても良いだろう。

- 交通費　　5200 円　自宅～高崎往復　高崎から宿までは無料送迎バス
- 宿泊費　　33600 円　夕食なし 7700 円×2、夕食付 8800 円×2
- 飲食費　　約 6000 円